

「ブックカバー・チャレンジ」
(2020.5.18)Facebook 上に投稿

田中 泉

第1日『ひろしま地歴ウォーク』(レタープレス社、2018年)・『西条地歴ウォーク』(レタープレス社、2020年)



「ブックカバー・チャレンジ」の中で、原野昇先生と竹本伸先生がそれぞれ紹介された本の中に、『ひろしま地歴ウォーク』がある。したがって、これが本当のバトンだ。原野先生は、広島中世史の会の仲間であり、竹本先生は広島地理教育研究会の仲間がこの本を一緒に作った。

『西条地歴ウォーク』は、やはり『ひろしま地歴ウォーク』を一緒に作った仲間の一人である広島大学の熊原康博先生が院生や卒業生と一緒に作られた本である。本の裏表紙には、「東広島市西条の地理と歴史を広島大学の院生と教員が本気で調べました」と書かれてある。「本気で」という気合の入り方が、この本の充実度を示している。おそらく古くから西条にお住みの方でも知らないような地理・歴史が詰まっていると思う。

「ブックカバー・チャレンジ」
(2020.5.19)Facebook 上に投稿

田中 泉

【第2日】 桜井寛『世界一周大陸横断鉄道』(PHP 新書、2005 年)



コロナによる巣ごもりで、旅に出たくても出られない人には最適な、読んだだけで旅をした気になる? 世界的に有名な豪華長距離列車の紹介である。

著者の桜井さんは著名な鉄道写真家だが、何より「乗り鉄」として自分自身が列車に乗ることが好きであることがこの本に如実に表れている。しかも、一人旅。ふつうこの手の本は、著者と編集者とか、著者とカメラマンの二人旅が多いもの。一人旅こそ「乗り鉄」の真骨頂で、乗ってから出会った人々とコミュニケーションをとれるのだ。この本でも、著者はコンパートメントや食堂車で一緒になった乗客や車掌さんなどと親しくなっている。

登場するのは、以下の5つの列車。

中国の「シルクロード特快」、オーストラリアの「インディアン・パシフィック号」(インド洋岸と太平洋岸を結ぶという意味)、シベリア鉄道「ロシア号」と「バイカル号」の乗り継ぎ、カナダ「オーシャン号」「メリディアン号」「カナディアン号」、アメリカの「エンパイア・ビルダー」。

いずれも、僕はまだ乗っていないが、死ぬまでには、このうち2本くらい、特に、オーストラリアとカナダは乗ってみたいと思っている。

「ブックカバー・チャレンジ」
(2020.5.20) Facebook 上に投稿

田中 泉

【第3日】 沢木耕太郎『深夜特急1』（『新潮文庫、平成6年）



「デリーからロンドンまで乗り合いバスだけで行くことができるか」を主題に旅する物語。文庫本だと第1巻から第6巻までである。この本を取り上げるのは、昨日の『世界一周 大陸横断鉄道の旅』と同じで、旅に出たい欲求を紛らわせる目的である。

沢木耕太郎には珍しいこの旅本は、1970年代前半に著者自身が旅した経験がもとになっている。ユーラシア大陸を東から西まで陸伝いでいけるかという課題がまずあったが、この当時、中国からインドまで陸伝いで行くことは当時の政治情勢からまず無理で、東京～香港～バンコク～デリーと空路を利用することになる。それがこの物語のミソで、主人公は、途中で寄ったマカオのカジノに没入してしまう。「大小」という単純なサイコロ賭博にはまってしまうのだ。第1巻はそれで終わる。

その後、デリーからのバスの旅が始まるのだが、(途中省略)、マルセイユまで着いて北上してロンドンまで行くつもりでいたのに、急に、ユーラシア大陸にはまだ西があるということに気付いてポルトガルのサグレス岬に向かうのだ。

この話を読んだとき、自分も、ユーラシアの最西端に行って見たいと思った。サグレス岬は、大航海時代を現出させたあのエンリケ航海王子が航海学校を開いた場所だ。それで、行き方を調べてみたら、なんと、サグレスより北にあるロカ岬の方が、西にあるということが分かった。今の職場に移った1995年の夏休みに行くことにした。ただ、時間も限られていることと、私はバスより鉄道派なので、ローマからロカまで鉄道で行ったのだけど、思わぬ良い旅になった。というのは、ボルドーからリスボンまでの夜行列車で同室になったカナダ人の男性と友達になって、その後3日間、共に旅をすることになり、その4年後には、カナダまで行くことになったから。ロカ岬につくと、目の前270度は大西洋が広がっていた。水平線は、わずかに弧状になっていて、そのカナダ人はこの海の向こうに自分の国があると言ったのだけど、そこで、気付いたのは、この景色を見ていたら、昔のポルトガル人がインドをめざして船出した気持ちが分かるということ。

「ブックカバー・チャレンジ」
(2020.5.21)Facebook 上に投稿

田中 泉

【第4日】田辺良平『加藤友三郎』（春秋社、平成 17 年改版）



この本は、広島市出身(大手町)の唯一の総理大臣(第 21 代、在位 1922.6~23.8)で、在任期間は短い、海軍と陸軍の大軍縮、シベリアからの撤兵という大事業を行った加藤友三郎を紹介している。著者は、広島の歴史家で、かつて比治山にあった加藤の銅像が戦時中に金属として供出されたのを憂い、新たに銅像を作るのに努力された方である。この銅像は市内の中央公園にある。

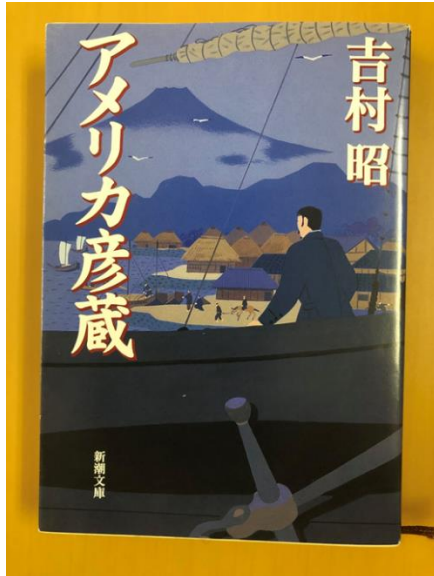
加藤が海軍大臣としてワシントン会議の全権となり、反対派の人びとを抑え、締結に至ったのは、当時の無制限の建艦競争により財政を圧迫していたことを考えれば、素晴らしい業績といえるだろう。そもそも加藤は、日露戦争の日本海海戦当時、連合艦隊の参謀長として、旗艦三笠の司令塔上で東郷平八郎長官の横に立って指示を出していた人物であり、軍備の重要性はよくよくわかっていた。

軍縮会議のポイントは、当時の強国イギリス・アメリカとの主力艦(戦艦)の保有トン数のバランスだったのだが、加藤が締結にこぎつけたのは、英:米:日=10:10:6 だった。私が、中学生の時にこれを社会科で習った際に、「日本が損をしたじゃないか」と単純に思った。実は、当時の海軍部内や国民もそう感じて、加藤に批判を浴びせた。しかし、この本を読んでわかるのは、イギリスは世界中に植民地を持っているし、アメリカは大西洋岸と太平洋岸に艦隊を分けると5になる(パナマ運河の幅より広い戦艦は通れない)ということがあるだけでなく、当時のアメリカやイギリスの財力や工業力は日本の十数倍であり、日本に対して6分の10に抑えることができるのはむしろ好都合なのだということを理解する必要がある。

「ブックカバー・チャレンジ」
(2020.5.22) Facebook 上に投稿

田中 泉

【第5日】吉村昭『アメリカ彦蔵』（新潮文庫、平成 13 年）



「アメリカ彦蔵」とは、開国直前の幕末の 1850 年、13 歳の時に乗っていた回船が嵐で難破し、漂流後にアメリカの貨物船に救助され、やがて、アメリカの東海岸で暮らしたのち、開国後に帰国した濱田彦蔵（幼名、彦太郎）のことである。

この人物に、最初に興味を持ったのは、2006 年にカリフォルニア大バークレー校で日系アメリカ人について研究していた際、最初の日系アメリカ人として Joseph Heco という名前を知ったからである。Heco ってどういう名前？と不思議に思ったのだ。Heco は、そのまま英語読みをするとヒコになるのだが。

私が日本に戻っていろいろ調べてみると、彼は濱田彦蔵という人物で、日本では「新聞の父」として知られていることが分かり、この吉村昭氏の本にたどり着いたのである。彦蔵は、日本に帰ると罪人扱いになると聞いて、アメリカ国籍を取得したのだ。もちろん、当時、日本人がアメリカ国籍になることは難しかったが、連邦議会議員の紹介で当時のブキャナン大統領とも会える境遇だったため、可能だったのだろう（その後リンカン大統領にも会っている）。開かれたばかりのアメリカ総領事館の通訳として帰国した彦蔵は、幕府の取調べを受けることもなく、横浜の外国人居留地にすみ日本最初の新聞『海外新聞』を発行した。横浜の中華街にはその碑がある。その後、長崎に移り、長州藩の武器調達に貢献している。この結果、明治維新後、伊藤博文などに重用された。彼のような境遇では、ジョン万次郎を思い出す人が多いが、万次郎は彦蔵のちょうど 10 年前に漂流・アメリカ滞在を経験しているが、帰国時にまだ鎖国中であつたために厳しい取調べを受けている。

さて、私は、この彦蔵に興味を持ち、出身地の兵庫県播磨町に行ったり、青山にあるお墓に詣でたりした。お墓は青山霊園の中の外国人墓地にある。しかも、日本人墓地のすぐ際に立っている。彦蔵は、60 歳で死ぬまでアメリカ国籍のままであつたのだ。しかし、彦蔵は生前、自分のアイデンティティに悩み、最後は日本人に戻りたかつたらしい。洋服をやめ和服で暮らしていたと言われる。帰国後に、周囲から奇異な目で見られることに次第に辟易したのだろう

「ブックカバー・チャレンジ」
(2020.5.23)Facebook 上に投稿

田中 泉

【第6日】ジャック・Y・タサカ『ホレホレ・ソング』（コミュニティ・ブックス社、昭和 60 年）



ハワイ移民に関する本を、なにか 1 つ紹介したいなと思い選んだのがこれ。ホレホレ・ソングとは、ホレホレ節とも呼ばれる労働歌で、サトウキビ畑で日本人移民たちが唄った歌である。この本では、100 を超えるほどある歌詞の中から選び、日本人移民が苦労と困難を乗り越えた移民生活の歴史を編んだものである。ちょっと紹介すると、

「ハワイハワイとよー、夢見てきたが、流す涙は、キビの中」

「今日のホレホレはよー、辛くはないよー、昨日届いた里便り」

「行こかメリケンよー、帰ろかジャパン、ここが思案のハワイ国」

ホレホレとは、サトウキビの枯れた葉をむしり取る作業のことで、葉の端はとげがあり、刺さると切れて痛い。移民たちはこの痛さに耐え続けた。

ハワイへの移民は、1885 年の官約移民に始まる。10 年の間に約 3 万人が海を渡ったが、そのうちの約 1 万 1 千人が広島からの移民で最も多い。広島は、日本一の移民県として知られている（最近では、知らない人が多いかもしれないが）。かつてハワイの日本語は、広島弁だったとも言われる。実際、「はぶてる」という言葉がハワイ英語に残っていたりする。広島から移民が多い理由は、簡単に言えば、水田に適した平坦な土地が少ないのに、浄土真宗の殺生禁忌の教えで墮胎・間引きがなく人口が増えたことと、楽天的な県民性（行けば何とかなる）。実は、この歌も、広島湾の漁民の海苔取り歌がもとであると著者は推察している。

著者のジャック・タサカ（日本名：田坂養民）氏は、父親が広島市水主（加古）町の出身で、移民会社の移民監督官としてハワイに赴いていた際、1914 年にホノルルで生まれ、4 歳で広島に戻り、小学校・中学校と廣嶋高等師範学校附属（現、広島大学附属小・中・高）に通い、大阪商科大学予科をでて、23 歳でハワイに戻り、戦後はラジオのアナウンサーとして活躍されていた。

私は、この 10 年、学生引率の仕事もあり、10 数回ハワイに渡って日系人の人と話す機会があるが、いたる所で広島とのつながりを感じることもある。ハワイ島コナの広島県人会の創設者加藤雅男さんについての論文もまとめた。この田坂さんは附属の先輩であるし、生前にお会いする機会があったらよかったと思うこともしばしばである。（偶然にも誕生日も同じ 8 月 26 日）

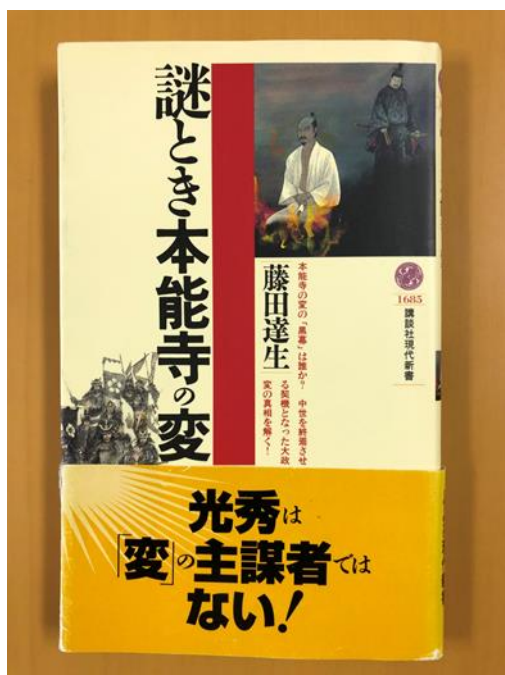
「横浜出るときゃよー、涙で出たが、今じゃ子もある孫もある」

「雨は降りだすよー、洗濯もんは濡れる、背なの子は泣く、まんま焦げる」

「ブックカバー・チャレンジ」
(2020.5.23) Facebook 上に投稿

田中 泉

【第7日】 藤田達生『謎とき本能寺の変』(講談社現代新書、2003 年)



いよいよ、最終日。最後の1冊を何にしようか、と思ったけど。

日ごろ、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」を評価していることもあって、これにした。

ここ2、3年、日本史、特に、古代～近世の歴史本が良く売れているようだ。呉座勇一『応仁の乱』はその典型。その他にも、中公新書を中心に、『壬申の乱』『承久の乱』『観応の擾乱』など、やっぱり乱は、面白いのだろう。特に承久の乱は、後鳥羽上皇のスーパーマンぶりが描かれていて、おもしろい。こちらも紹介したかった。

さて、『謎とき本能寺の変』だが、帯にあるように、主謀者を明智光秀ではなく、別の人物を推定している。藤田達生氏は、三重大大学の日本史の教授でほかにも、『天下統一』や『秀吉と海賊大名』などの新書本を出版されていて、信長・秀吉期の専門家として、新しい歴史解釈を広めておられる。この本では、別の主謀者として、室町幕府第15代将軍足利義昭が提示される。足利義昭は、信長によって京都から放逐され、教科書的には、ここで室町幕府は終わったことになっているが、藤田氏は義昭が毛利氏の保護の元で鞆の浦に移り、そこで全国の反信長の大名に決起を命じていることから幕府はまだ続いており、これを「鞆幕府」と呼んでいる。この時点で、日本には、信長の安土幕府と義昭の鞆幕府があったという解釈である。その義昭と光秀は、旧知の仲というか、もともと光秀は義昭の家臣でもあり、信長にも仕えたということになる。そして、光秀が最終的に変を起こすのは、四国支配をめぐるライバル秀吉との関係で、信長の指示に従えなくなったということになる。ドラマなどでは、信長が光秀を家康の接待役とした際に、そのやり方を叱り飛ばして多くの人の前で恥をかかせられたことを造反の理由とすることが多いが、それはドラマとして面白いからで、本当は、もっと大きな理由があったのだということが分かる。